

令和7年度個別学力検査
問題訂正

小論文

(後期日程)

医学部 (看護学科)

注意事項

1. 試験開始まで、この問題訂正紙の裏面を見てはいけません。
2. 「解答はじめ」の指示の後に裏返しなさい。
3. 試験終了後、この問題訂正紙は持ち帰りなさい。

令和7年度個別学力検査問題訂正

教科・科目名

小論文 医学部（看護学科）

次のとおり問題を訂正してください。

〔後期日程〕

問題訂正

2ページ 21行目

(誤) ……人間性に則していると思います。(正) ……人間性に即していると思います。

令和7年度入学試験問題

小論文

(後期日程)

医学部(看護学科)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は3ページあります。
3. 解答用紙は2枚あります。すべての解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入しなさい。受験番号が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
4. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入しなさい。
5. 下書き用紙が1枚あります。
6. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁及び汚損等がある場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
7. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、後の各問に答えよ。

日本社会の LGBTQ への対応は十分か。まずファクトチェックをしてみましょ
①う。

日本は世界の先進国ということになっていますが、先進国中の先進国の集まりである G7 で LGBTQ の扱いがどうなっているのかというと、5 つの国で合法的に結婚ができ、1 つの国で正式な結婚でなくてもフランスの PACS (連帯市民協約) のようなパートナーシップ (シビルユニオン) が認められています。

それに対して日本では法的な結婚は認められておらず、パートナーシップも 60 ほどの自治体でかろうじて結べるだけの状況です (2020 年 10 月末現在)。このような国は G7 では日本のみです。

< 中略 >

LGBTQ のような少数派を認めていけば、社会の秩序が崩れてしまう、どこまで尊重すればいいのかキリがない、という声もあります。

そうした問題を考えるときに留意しなければいけないのは、その問題は多数決で決めていいのかどうか、ということです。たとえば、消費税を 15 % に上げるかどうかは多数決で決めていい。しかし、基本的人権はどのような社会であっても多数決とは関係なく、保障されなければいけない問題です。

LGBTQ は、基本的人権の問題で、多数決の問題ではありません。

同様に夫婦別姓問題も、ほとんどの場合は女性が姓を変えているので女性に対する人権侵害だという理解が国連でもなされており、やはり多数決の問題ではありません。ですから国連は 3 回にわたって夫婦別姓を認めるように日本に勧告を行っているのです。ちなみに法律婚で夫婦同姓を強制しているのは OECD 加盟国の中では日本だけです。

社会問題について考えるときは、数の論理で判断できるのか、それとも数の論理
②とは関係のない人権に関わる問題なのかを、分けて考える必要があります。

< 中略 >

LGBTQ からは逸れますが、インクルージョンは都市のあり方にも当てはまりません。

20世紀の都市論は、世界遺産になった上野の国立西洋美術館を設計したル・コルビュジエの思想が1つの基盤になっています。都市の中に大きな道を縦横に走らせ、ここは住宅地区、ここは商業地区、ここは工業地区とセパレート(分離)してゾーニングするという発想です。ブラジルの首都ブラジリアはこの思想に則^{のつと}って建設されています。

この考え方に真っ向から反対したのがジェイン・ジェイコブズというアメリカ人のジャーナリスト・都市研究家です。彼女は真っ直^すぐな道など面白くも何ともない、道はくねくねと曲がっていて、どこへつながっているのかわからないほうが楽しい、町も商店やオフィス、住宅などがごちゃ混ぜのほうがいい、なぜならば人間は仕事もすれば、モノも買うし、生活もしているのだから、と主張しました。インクルージョンの発想です。

20世紀の都市論は、この2つの思想のあいだで争われました。どちらの町が楽しいかはいうまでもありません。どこかの国へ行き、とてもきれいで大きくて真っ直^すぐな目抜き通りがあって、その裏になんとか怪しげな小道があるとしたら、皆さんはどちらの道を歩くでしょうか。

僕なら迷うことなく怪しげな道のほうへ行きます。大きくて真っ直^すぐな道は車には便利でしょうが、人間にとっては決して魅力的ではありません。一目で遠くまで見通せてしまう道より、人の営みのにおいがする路地を歩きたいというのが、人間の素朴な心理ではないでしょうか。

こんなことから、僕は、セパレートの思想よりもインクルージョンの思想のほうが、人間性に則していると思います。

セパレートの思想は産業革命によって均質な労働者を確保するために生まれました。学校がその典型です。そして、セパレートの思想は均質な労働者に加えて、国民皆兵にも合致したため、国民国家の中で急速に市民権を得ていきました。それ以前の人間社会はインクルージョンの社会でした。つまり、セパレートの思想のほうがずっと新しいのです。

インクルージョンの思想に基づけば、事業主に一定割合の障がい者を雇用するよう義務づけている障害者雇用促進法は意義あるものといえます(民間企業は2.2%、国や自治体は2.5%)。

ところが、2018年には、国や自治体が、障がい者の雇用率を水増しするという、実に情けない事実が次々と発覚しました。

2周も3周も周回遅れの日本で、LGBTQや障がい者など少数派の人たちが安心して暮らせる社会の実現は、急務です。

出口治明(2020)『自分の頭で考える日本の論点』、幻冬舎新書、138-145頁(設問の都合上、表記を一部改変した。)

問1 下線部①の「LGBTQ」とは何か。100字以内で説明しなさい。

問2 下線部②の「社会問題について考えるときは、数の論理で判断できるのか、それとも数の論理とは関係のない人権に関わる問題なのかを、分けて考える必要があります。」という記述について、なぜ筆者がそのように述べているのか150字以内で説明しなさい。

問3 本文で述べられている内容をふまえ、少数派の人が生きやすい社会の実現に向けて必要なことについて、具体的な例をまじえてあなたの考えを600字以内で論じなさい。

(なお、この小論文試験は、論旨の明確さ、言葉の正確さ、あるいは、文章の論理性をみるためのものであり、個人の思想や信条は評価に関係しません。)